



歴史資料を読み解く

テーマ 崇元寺で行われた儀式

関連資料

- ①『歴代宝案』校訂本 1-02-04 (皇帝から故尚真王に対する諭祭文)
 ②『歴代宝案』訳注本 1-02-04 (皇帝から故尚真王に対する諭祭文)
 ③『歴代宝案』訳注本 1-01-30 (皇帝から故尚永王に対する諭祭文)



史料1 『歴代宝案』 皇帝の、故国王尚真に対する諭祭文と祭品目録（1532年）

崇元寺^{そうげんじ}*1において祭礼^{さいらい}を行う。これはその祭文^{さいぶん}（祭礼の文書）である。（内容を）左に記す。
 諭祭文^{ゆさいぶん}

嘉靖11年（1532）壬辰月朔日、皇帝が冊封正使の陳侃^{ちんかん}と副使の高澄^{こうちやう}を派遣し、琉球国中山王の尚真^{しやうしん}を諭祭させる。（皇帝）いわく、「王（尚真）は海邦（琉球）を嗣いで守ること40年余、天を敬い上（皇帝）につかえ、誠実な態度は一貫している。寿命を永くし、朕の藩屏^{はんぺい}*2となるべきであった。どうして病に罹り、突然逝ってしまったのか。訃報^{ふほう}に接したので、心から哀悼^{あいとう}する。官（冊封使）を派遣して諭祭し、格別の恩を示す。（尚真の霊は）知恵があるのだから、よく喜んで従うように。 祭品

牛1頭

猪1匹

羊1匹（以下、略）

『歴代宝案』第1集2巻4号文書より

史料2 『使琉球録』（1534年）

超えて（六月）十六日、（先）王（尚真）を祭る礼を挙^あげた。 （中略）寝廟（崇元寺）が一カ所、国門の外にある。その廟で諭祭を執行したのである。生きている者を（王に）封じ、また死んだ者を丁重に祭るということは、天下に忠を勧めるためである。諭祭礼を、冊封礼に先んじて執行するのは、（先王を）尊ぶからであり、天下に孝を勧めるためである。忠孝の道が、中国の周辺の国々で行われるならば、遠国といえども、ひとつの家なのである。（中略）



崇元寺石門（大正14年）

廟に到着しようとしたとき、世子（尚清）は白い布に黒い帯をしめて、門の外で迎えた。悲しげなその顔は、おごそかに喪に服している人のありさまであった。私たちは、（出迎えた世子に）拱^{こまぬ}いて*3、（門へ）入った。寝廟につくと、（先王の）神主^{しんしゅ}（位牌）は東に安置されて西に向けられており、私たちは西に位置して東に向いた。竜亭*4は（廟の）中に安置されて南に向けられ、世子は南に位置して北に向いた。諭祭文が読み上げられた。（後略）

原田禹雄訳注『陳侃 使琉球録』を一部改変

解説

- ・『歴代宝案』は、琉球国王が諸外国と交わした外交文書を書き写した記録です。原本は沖縄戦などで失われたとされています。
- ・中国の皇帝から琉球の国王であることを承認してもらうことを冊封（さっぽうともいう）といいます。冊封のために中国から派遣された使節のことを冊封使といいます。
- ・琉球では、新しい国王が即位する前に、亡くなった前代の国王を崇元寺で弔いました（諭祭）。

→ 見てみよう 奉使琉球図 諭祭先王



- ・史料1は、諭祭で読み上げられた追悼文（諭祭文）です。控えのため、日付は記入されていません。
- ・史料2は、冊封使の陳侃が記した文書です。崇元寺で諭祭文が読み上げられたことがわかります。

用語

*1 崇元寺：那覇市泊1丁目にあった寺院。歴代国王の位牌が祀られた国廟であったが、沖縄戦で焼失した。

→ 行ってみよう 国指定重要文化財「旧崇元寺第一門及び石牆」

*2 藩屏：防備のための囲い。ここでは皇帝を守護する存在。

*3 拱く：両手を胸の前で重ね合わせる礼。

*4 竜亭：皇帝に関わるものを乗せる輿。ここでは諭祭文が乗っている。

トライ1

史料1 皇帝が冊封使を派遣して行かせたことは何でしょうか。

トライ2

史料2 新国王の即位前に前代の国王を弔う理由はなんなのでしょうか。